

アメリカでは 1977 年の「マクガバンレポート」により、病気の原因は生活習慣そのものであるという結論に至りました。そこから病気を自己責任と捉えるようになりました。アメリカには国民皆保険制度はありませんから、個人個人が民間の保険に入る必要があります。民間の保険会社は営利団体ですから、不利益を被ることは行いませんので、したがって不健康な人は保険に入れてもらえないのです。その為、病院での治療費は非常に高額です。そのため「出来れば病院には行きたくない」という国民のニーズが大きくなって行きました。要するに、病院に行かないようにするためには、病気を予防して健康を維持して行くしかないという結論になるのです。

治療法も手術、投薬を中心とした医療からサプリメントを用いた栄養療法やハーブ療法、東洋医学（漢方、鍼灸）、カイロプラクティック、運動療法など身体に負担が少ない治療法から試して行きたいと希望する人々が増えていきました。アメリカ政府はこのような国民のニーズを尊重して米国国立補完・代替医療センターと呼ばれる国家機関を設置して幾つかの法律を改正しております。

その一方、医療機関やアメリカ医師たちも患者離れを食い止めていくためには、ユーザーのニーズ、つまり国民のニーズを満たすしか方法はありませんでしたので、ハーブやサプリメントを使った治療法を採用したり、栄養学的なアプローチを試みたりして、従来の治療医療から予防中心への医療へと転換して行ったのです。国民の市場が治療医療から予防医療へと転換したため、アメリカの医師達は自分たちの生き残りをかけて後者へ転換していったという何ともアメリカ人らしい合理的な考え方なのではないでしょうか。

この考え方が未だに日本では起こっていないことが非常に不思議でなりません。先進国で一番最先端医療機器を持つ日本、世界に誇る人間ドック、脳ドックシステムを持ちながら病人は減ることなく増え続け、国民医療費もとうとう 33 兆円を超えたようです。今、アメリカや他の先進国がどのようになっているのか。それを知ることが出来れば必ず日本も遅れてそのようになってしまうのですから、最先端ということになりますね。